

T日程入試 2限

科目	ページ
数 学 ①	2～5
数 学 ②	8～23
地 理	24～36
国 語	63～41

〈注意事項〉

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 志望学部・学科によって選択する科目・試験時間が決まっているので注意すること。

志望学部・学科	選択する科目	試験時間
下記以外の学部・学科	数学①, 国語から1科目選択	60分
文学部(日本文学科)	国 語	90分
文学部(地理学科)	地 理	60分
情報科学部(コンピュータ科学・デジタルメディア学科)	数学①	60分
デザイン工学部 (建築・都市環境デザイン工・システムデザイン学科)	数学②	90分
理工学部 (機械工〔機械工学専修〕・電気電子工・応用情報工・ 経営システム工・創生科学科)		
生命科学部 (生命機能〔生命機能学専修・植物医科学専修〕・環境応用化学科)		

4. 試験開始後の科目の変更は認めない。
5. 数学・国語については、志望学部・学科によって解答する問題番号が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。
6. 数学については、定規、コンパス、電卓の使用は認めないので注意すること。
7. マークシート解答方法については、問題冊子を裏返して裏表紙の注意事項を読みなさい。ただし、問題冊子を開かないこと。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

多くの出来事が視覚的なイメージに変換される現代世界においては、その多くのイメージがメディアの中で「偶像」^{*}となり得る。作られたイメージは現実を指示するのではなく、かえって現実を見えなくする「偶像」として機能することもある。その一例を「テロとの戦い」というリアルポリテイクの中に見てみたい。

九・一一以降、テロとの戦いという文脈の中で「悪」という表現が多用されてきた。反米感情の強い中東世界では、「悪」に打ち勝つべく戦っているはずのアメリカに対し「悪」という呼び名が与えられてきた。いずれにせよ、善と悪の戦いというイメージが、相互の敵対感情を強めてきたという側面がある。ロバート・ベラは、ブッシュ米大統領(当時)の発言をめぐり次のようなコメントをしている。

ブッシュの言葉は、奇妙なことに、オサマ・ビン・ラディンの言葉を写しているかのようである。ビン・ラディンも自身が「悪」と戦っていると信じているのだ。このことは長引くテロに対する戦争の中で、われわれが多くの点において、敵対者に似てくるということを暗示している。

ベラが指摘するように、¹善と悪というイメージは容易に反転し増殖する。これは偶像崇拜の力の一面を表している。現代世界において増殖の力を身にまといながら、グローバルな影響力を与えているのが、資本主義に象徴される「物質主義」であり、米軍の軍事介入に象徴される「帝国主義」であるとするなら、その抑圧を受ける者が、それらの力を偶像崇拜的²と見なし、批判するのは不思議なことではない。別の言い方をすれば、物質主義や帝国主義といった「見えざる偶像崇拜」は「構造的暴力」の温床になり得るといふことであり、その暴力性に立ち向かうために、時として「直接的暴力」が行使される。

「構造的暴力」は平和学を中心にすでによく知られている言葉であるが、ヨハン・ガルトウングによる定義を確認しておきたい。彼は、ただ個人的・直接的な暴力を解消するだけでは平和を実現することはできないと考え、暴力の概念を次のように拡張した。「ある人に対して影響力が行使された結果、彼が現実^{*}に肉体的、精神的に実現しえなかったものが、彼のもつ潜在的实现可

能性を下回った場合、そこには暴力が存在する」。この暴力が「構造的暴力」と呼ばれている。先の文脈に立ち返って言い換えるなら、たとえばムスリムが、西洋由来の物質主義や帝国主義の影響力のゆえに、本来持ち得たはずの「尊厳」を損ない、また人生設計の自由を狭められているとするなら、そこには「A」が存在していると言える。その意味で、「見えざる偶像崇拜」が「B」を増殖させているのであり、その暴力性を自覚した者が、偶像破壊行為として「C」に訴えることもある。

それがきわめて過激な形で現れたのが、九・一一同時多発テロ事件であった。テロリストたちの目には、ワールド・トレード・センターは資本主義の富と暴力を体現した「偶像」として映っていたかもしれない。ペンタゴンもまた軍事力を体現した「偶像」として映っていたことだろう。だからこそ、あの事件は、多くの尊い人命の損失にもかかわらず、偶像の破壊を見ようとする欲求に形作られた大きな歓喜の声を伴ったのであった。絶望と歓喜を同居させるような偶像破壊行為を繰り返さないために、我々は偶像の背後に何を見るべきなのであるか。

偶像破壊という本来宗教的な行為が、政治的・社会的な領域にまで転移していくのは、偶像崇拜に内蔵された増殖機能に由来すると言えるが、増殖の素地を与えているものは一体何なのか。ここでは、それを終末論と進化論として考えてみたい。

終末論は、しばしば、世界が善と悪の戦争状態にあることを語る。そのような世界観が前提にされると、この世界はすでに戦争状態にあるという理由から、暴力行為が正当化されることにもなる。言い換えるなら、終末論は暴力を宗教的に正当化する「構造的暴力」として機能する危険性がある。もちろん、終末論は既存の社会秩序を越えた新しいビジョンを指し示すという建設的な側面も持っており、また、暴力の否定と結びつく場合もある。このように終末論は、今ある現実を容認しないという基本姿勢から、暴力的なエネルギーにも、平和を希求するエネルギーにも変移し得る「D」を持っている。この終末論の「D」を認識すれば、平和を求めて悪と戦っているはずの善が、いつの間にか敵対者に似てくるというペラの指摘に見られる、善と悪の転移のメカニズムが見えてくるであろう。

終末論は、一神教に共通して見られる世界観・歴史観であるが、その影響力は姿を変えて、非宗教的な世界までも覆っている。

る。その代表例は進化論である。ここで言う進化論は、生物学的な進化論というよりは、むしろ社会ダーウィニズムのことである。社会ダーウィニズムは、「生存競争」「適者生存」といった生物学上の進化論の考え方を、人間社会にも適用しようとする。一九世紀に誕生した社会ダーウィニズムは、二〇世紀初頭には優生学を生み出すことになった。優生学は進化論と遺伝の原理を人間に應用して、人間の自然的運命を改良しようとした。終末論は、神を前提として人間の運命を描写しようとしたが、社会ダーウィニズムや優生学は、神なしに、人間や社会や国家の運命を描写しようとするのである。その意味で、社会ダーウィニズムに代表される進化論は、キリスト教の終末論が世俗化した形態であると言えるだろう。

社会ダーウィニズムが生み出したもう一つのもは、進化論的な文明理解である。簡単に言えば、二〇世紀初頭より、アングロ・サクソン文明を頂点として文明を進化論的に序列化する考え方が、西洋社会では広く受け入れられることになった。したがって、終末論が暴力を正当化する「構造的暴力」として機能することがあるように、進化論もまた、文明の序列を前提とすることによって、優秀な文明が劣った文明を支配するのは当然であるという「構造的暴力」に移し得るのである。これらがリアルポリテイクに影響を及ぼしてきたことは言うまでもない。序列化された文明という E の上に立つ諸々の偶像に向けられた敵意も、その一部なのである。

西洋近代にとって、固定化された伝統的価値、とりわけ宗教に依拠する価値は、打破すべき「偶像」として映っていた。他方、イスラーム主義者のように宗教的な規範性を重視する人々からすれば、人間の主権を強調しすぎる西洋的な近代化こそが、避けなければならない「偶像」である。両者の偶像破壊行為が、今日、価値の衝突を引き起こしている。

価値の衝突は西洋世界とイスラーム世界との間に限定されない。米国とヨーロッパのリアルポリテイクにおける衝突も同様の問題ははらんでいる。米国では「信じることへの自由」を叫ぶ声は少なくなく、他方、ヨーロッパでは宗教からの自由が近代国家形成の前提とされてきた。米国では、国家が偶像的になる危険性を持つと考え、宗教は国家の介入から個人を守る役割を果たしていると考えられてきた。他方、啓蒙主義以降のヨーロッパでは、宗教の介入から個人を守る役割を国家が果たすと考えられ、宗教が持つ潜在的な力に対し常に警戒をしてきた。もちろん、このような基本的な違い³にもかかわらず、米国もヨ

ヨーロッパも、多文化主義的な価値を積極的に受けとめようとしている姿勢においては一致している。しかし同時に、多文化主義がとどめる「寛容」だけでは今日の問題を解決することができないことも明らかになりつつある。なぜなら、多文化主義を生み出してきた啓蒙主義精神そのものを疑問視し、あるいは、それを敵視する人々が、米国の中でも、ヨーロッパの中にも多数存在するからである。

(小原克博『宗教のポリテイクス』より。文章を一部省略した)

【注】 *偶像

キリスト教やイスラームなどの一神教で厳しく崇拜を禁じられた、形象化された信仰対象のこと。ここでは出来事や観念など、イメージ化されて妄信されるものも含めていう。

*リアルポリテイク

現実の政策。

*ロバート・ベラ

アメリカの宗教社会学者(一九二七―)。日本研究でも知られる。

*ヨハン・ガルトウング

ノルウェーの政治学者・平和研究者(一九三〇―)。

*ムスリム

イスラームの信徒のこと。

*終末論

現在の世界が破滅し、その後新たな理想的世界が実現するという思想。